

共同研究プロジェクト

多様化する学生と大学英語教育

2014年度活動報告

陸 君・中窪 靖

プロジェクト2年目の今年も、前年に引き続き ALC NetAcademy 2を用いた英語学習の調査を行った。今年は昨年度とは異なり、春学期に「英文法コース」を、秋学期に「PowerWords コースプラス」を学生への課題とした。毎週欠かさずに学生の学習を追跡調査したり、月一度の割合で予定の課題がこなせない理由を聴取したり、学習のモチベーションを上げるための様々な働きかけを実施した。この試みは一部学生には効果があったものの、学生の多数派を取り込むほどの効果を持ちえなかった。

昨年度は学会にてポスター発表を行い、各大学での様々な学習の動機づけのための試みを知る機会を得たが、今年度は研究メンバー全員での学会発表や情報収集のための学会参加を実行することはできなかった。代わりに、人間学研究所の紀要に、2年間の研究の成果をまとめることとした。3年間を一つのスパンとする本研究プロジェクトにあって、2年目で論文を寄せることは未だ調査の中間報告的な要素を多分に含むものである。しかしながら、一度研究の成果を客観的に見ることは重要と考えた。

概略は以下の通りである。

京都文教大学は、平成8年（1996年）に開学した。英語科目は3年次まで必修の形態をとり、6単位が卒業要件でかつ段階制をとっていたため、再履修を2度繰り返すと卒業延期が決定するという、学生にはきわめて厳しいシステムで動いていた。「コミュニケーション科目群」という名の括りの中には、選択の英語 IV の他、初習外国語として仏語 I&II、西語 I&II、中国語 I&II が置かれた。この科目群の卒業要件は、計10単位である。

開学5年目、京都文教大学は Semester 制の「新カリキュラム」を始めることとなった。1年次に週に2回開講される英語科目より4単位を修得した上で、残りの8単位は新たに加わった独語 I,II,III&IV と仏語 I,II,III&IV、西語 I,II,III&IV、中国語 I,II,III&IV の初習外国語と、英語コミュニケーション III,IV,V&VI と英語リーディング III,IV,V&VI との中から選択する。

その後この「新カリキュラム」は、2004年度の新学科（現代社会学科）立ち上げを経て2008年度まで続く。その間新しい問題が顕著になる。学生の英語基礎力の低下や大学での学習への不適応である。こうした大学での学習に困難を示す学生の多くが迷走し始める。2年次配当の英語科目に失敗した後、初習外国語にも挫折する。そして、英語に再チャレンジする。その結果、特に選択英語クラスの履修者数にばらつきが生じ、英語科目担当者は学期の初めにその対応に追われるようになった。さらに深刻な問題は、こうした学生は初習外国語の基礎をものにできないばかりか、ブランクを経て英語クラスに復帰するため英語に対する学習効率も悪くなってしまう。つまり、彼らの語学の学習が全く中途半端に終わるのである。

2009年4月、英語の必要単位数を明確にした。すべての学生は、毎週2回の英語の授業を2年間受講し、8単位を修得する。合わせて、初習外国語を2単位修得する。この結果、学期の初めに必ず対応に追われていたクラス間の人数調整の必要性がなくなった。また、学生にとっては、2年にわたり会話型と購読型の授業を並行して学ぶことにより、語学学習の中心に英語が置かれていることが明確になった。必修英語科目の

締めくくりの意味を込め12月に実施しているスピーチのテストが彼らの目標の一つであることは疑いがない。2013年4月臨床心理学部に教育福祉心理学科が開設され、総合社会学部が総合社会学科の一学科体制になって以降、一部学科(臨床心理学科)を除き学生の語学の負担は軽減した。初習外国語が卒業要件から外された。そうした時間の流れの中で、いわゆる2009年からの「新新カリキュラム」は概ね順調に運営されていると言える。しかしながら、未だ解決できない問題は残ったままである。大学での学習に適応できない学生の存在である。本学のように

心理学・臨床心理学を置いている大学に顕著である「精神的不適応の学生」のみならず、教室に決められた時間に集まり決められた環境の中で集中することのできない「物理的不適応の学生」への適切な対応の方法の模索である。

2013年4月より始まった本研究プロジェクトは、この対応の方法として自宅からもアクセス可能であるコンピューターによる自学自習の英語学習の効果を模索することである。今年はその中間報告的な意味合いの結果報告を、人間学研究所紀要『人間学研究』にて行った。